

仏様のおはなし新シリーズ第105集 「コロナ禍で思うこと」

今年はコロナ禍の中で、「東日本大震災」から9年目を迎えました。

東日本を襲った大地震は、人間のいのちの尊さと、はかなさを教えると共に止めどもなく欲望を拡大する現代社会を省みる出来事でした。

それは被災者の方々だけの問題ではなく、私たち一人一人が真剣に考えなければならぬ問題です。この大地震では大地が揺れ動き大切な家屋や家族が一瞬にして崩壊してしまつたのです。

当てにしていたものが、頼りにならなかつたのです。

その様な娑婆世界を私たちは生きていくと知らされました。

震災時、私はテレビを見ておりましたら、ちょうど被災された方々が地元のある体育館に逃れられ、暖をとってらつしやる光景が画面に映し込まれました。

しばらくすると地元の中学生たちが被災者の人々を励まそうと体育館のステージに大きな横断幕を張る姿が目に入りました。その横断幕には「今いのちあることを喜ぼう」と書いてありました。また反対側にも横断幕が張られました。それには「ともに繋がりがあつて生きていこう」と書いてあつたことを今でも覚えています。

親鸞聖人は今からおおよそ七百五十年前あいつぐ争乱や災害、それに伴う大飢饉など混乱の時代に真実の教えを求められました。多くの人々の悲しみ、苦しみ、憎しみに向き合われ阿弥陀如来のお救いを明らかにされ、そのお救いの確かさに安心していくそのお姿が、また周囲の人々に生きる喜びをもたらしました。

親鸞聖人はご和讃のなかで

「生死の苦海ほとりなし

ひさしくしずめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける」

とお示しになられ、阿弥陀如来の必ず救うとの誓いが成就せられたお念仏をいただき、このみ教えに遇えたことの喜びを伝えて下さいました。

大震災やコロナ禍の中で、「諸行無常・生かされているいのち」と知らされるとき、人として生まれた喜びと悲しみを深く受け止め、共にお念仏申しお浄土への人生を歩まさせていただきましよう。

浄土真宗本願寺派福岡組



福岡組

検索